駒澤大学 140 年のあゆみ

― 図書館を中心として ―

奥　野　光　賢

＊本稿は、今年（2022）が本学の開校 140 周年にあたるところから、社会連携センターの求めに応じ、同センターの企画になる令和 4 年度特別無料講座「駒澤大学開校 140 周年に寄せて」において、本稿と同名のタイトルで発表した講座資料をもとに原稿化するものである。

原稿化するにあたって、大幅に加除をおこなった。講座資料中の特に「藤田俊訓」に的を絞り、さらに大幅に加筆して「駒澤大学と藤田俊訓」と題する独立した新稿として発表しようとも思ったが、やはり 140 周年記念新図書館に思い入れがあるので発表時の講座資料を原則として踏襲し、題名もそのままとした。

もとより本稿は、新しい知見を提供する学術論文ではなく、その意味では本紀要にそぐわない内容であるとも懸念するが、『駒澤大学八十年史』に始まる本学の歴代の正史（『九十年史』『百年史』『百二十年史』）には記されない言わば裏面史を伝えることによって、本学の歴史を記録する一齣になればと願うものである。

記述の仕方については、いろいろ考えた末、異例の形式ではあるが冒頭に講座資料で掲げた「年表」を若干改変して示し、それに注を付して対応する《記述》を記すという方法を採ることにした。

はじめに

本学の淵源は遠く文禄元年（1592）駿河台吉祥寺境内に設立された学林（学寮）に遡るが [注 1]、近代的な教育機関としての歩みは、明治 15 年（1882）当時の麻布区北日ヶ窪にそれまでの「曹洞宗専門学本校」を移転し、校舎を新築して、10 月 15 日に校名を「曹洞宗大学林専門本校」としたときに始まる。本学はこ

の日を開校記念日としているので、今年（2022）は開校 140 周年の節目となる。また来年は大正 2 年（1913）に本学がここ「駒沢」の地に移ってから 110 年目となる[注2]。この機会に、私はかつて図書館の運営に携わっていたこともあることから、図書館関係のことを中心に、ここに駒澤大学の歴史の一端を振り返ってみたいと思う。以下、《関連年表》を示し、関係する事柄を記述してゆきたい。

《関連年表》駒澤大学の沿革

「学林」→「旃檀林」→「曹洞宗専門学本校」→「曹洞宗大学林専門本校」→「曹洞宗大学」→「駒澤大学」

・文禄元年（1592）駿河台吉祥寺境内に学林を設立。当時は吉祥寺会下学寮と呼ばれていた
・明暦 3 年（1657）吉祥寺、駒込に移転。陳道栄が**旃檀林**[注3]と命名
・明治 8 年（1875）**曹洞宗専門学本校**を青松寺獅子窟学寮内[注4]に開校
・明治 9 年（1876）曹洞宗専門学本校を駒込吉祥寺に移して旃檀林と合併
・明治 15 年（1882）麻布区北日ヶ窪に校舎を新築して移転。10 月 15 日に校名を**曹洞宗大学林専門本校**とし、この日を開校記念日とする
・明治 37 年（1904）専門学校令による大学として認可
・明治 38 年（1905）校名を**曹洞宗大学**と改称
・明治 40 年（1907）5 月 25 日、独立の建物としての図書館（図書室）の上棟式
・明治 41 年（1908）4 月 26 日開館式挙行。曹洞宗大学図書館（麻布北日ヶ窪町 43 番地、現在の港区六本木 6 丁目付近）
・大正 2 年（1913）曹洞宗大学を現在の駒沢（旧東京府荏原郡駒澤村）に移転。このとき図書館も移築され、同年初代館長に高田儀光が就任[注5]
・大正 7 年（1918）大学令発令
・大正 8 年（1919）大学令改訂・公布[注6]
・大正 12 年（1923）9 月 1 日**関東大震災**発生。図書館のみならず学内の諸施設が甚大な被害を受ける[注7]
・大正 14 年（1925）3 月 30 日、大学令による大学として認可[注8]、**駒澤大学**[注9]と改称⇒文学部（仏教学科、東洋学科、人文学科）[注10]
・大正14年(1925)4 月鉄筋 3 階段書庫建設開始。設計者菅原榮蔵(1892-1967)[注11]
菅原は大日本麦酒本社（現銀座ライオンビル）や新橋演舞場の設計者として有名であり、初代本学図書館も菅原の代表的建築物に数えられている

・昭和 3（1928）年 3 月図書館（図書閲覧室兼研究室）竣工
3 月 7 日の落成式に合わせて『**禅籍目録**』（駒澤大学図書館）を刊行 (注 12)
・昭和 17 年 6 月、小川霊道、第 7 代図書館長に就任 (注 13)
・昭和 24 年（1949）学制改革により**新制大学**に移行
仏教学部、文学部、商経学部 (注 14)（3 学部 9 学科）
・昭和 25 年（1950）駒澤短期大学仏教科（第 2 部）を開設
・昭和 33 年（1958）藤田俊訓 (注 15)、学監 (注 16) に就任
・昭和 36 年（1961）駒澤エックス線技師学校創設
・昭和 37 年（1962）短期大学に国文科・英文科を開設
・昭和 37 年（1962）『新纂禅籍目録』の刊行⇒**開校 80 周年記念** (注 17)
4 月 10 日、読売新聞社社主正力松太郎に名誉博士号を授与 (注 18)
記念講演「禅と私の体験」。図書館、東京會舘で祝賀会
第 32 回日本佛教学会学術大会を開催。図書館書庫の増設 (注 19)
・昭和 38 年（1963）5 月『新纂禅籍目録』の刊行に対して私立大学図書館協会より協会賞を授与される (注 20)
・昭和 39 年（1964）法学部を開設 (注 21)
・昭和 41 年（1966）商経学部を経済学部に名称変更
・昭和 42 年（1967）文学部に地理学科、歴史学科を開設。短大放射線科を開設
・昭和 44 年（1969）経営学部を開設
・昭和 44 年度（1969 年度）学内諸整備事業のうち、特に大学院・学部学科増設や蔵書の急増対策のため新図書館建設構想が持ち上がる
・昭和 46 年（1971）、新図書館（第 2 代図書館）第 2 次基本設計・模型完成。設計者は当時の東京大学工学部教授吉武泰水（1916-2003）。鹿島建設が落札し、12 月 1 日に地鎮式
・昭和 47 年（1972）、第 31 回日本宗教学会学術大会を開催。⇒**開校 90 周年記念**
三笠宮崇仁殿下「古代オリエントにおける天」と題して記念講演 (注 22)
・昭和 48 年（1973）1 月 31 日、第 2 代図書館完成、2 月 19 日竣工式 (注 23)
9 月 6 日、落成開館式⇒**開校 90 周年記念**
初代図書館より 27 万冊を搬入
初代図書館は耕雲館 (注 24) と名称をかえ、研究室、仏教行事等に利用される
・昭和 49 年（1974）7 月、第 35 回私立大学図書館協会総会研究大会開催
・昭和 49 年（1974）11 月 5 日、三笠宮崇仁殿下、図書館参観 (注 25)

・昭和 57 年（1982）本部棟、1 号館の建設⇒**開校 100 周年記念**
　第 33 回日本印度学仏教学会学術大会を開催
・平成 11 年（1999）6 月 1 日、耕雲館が東京都より歴史的建造物に選定される
・平成 14 年（2002）6 月 1 日、禅文化歴史博物館として開館⇒**開校 120 周年記念**
・平成 15 年（2003）医療健康科学部を開設
・平成 18 年（2006）GMS 学部を開設
・平成 30 年（2018）3 号館（種月館）完成。⇒**開校 130 周年記念**
・令和 3 年（2021）『禅籍目録電子版』の公開 (注 26) ⇒禅ブランディング事業の一環
・令和 4 年（2022）6 月 1 日、禅文化歴史博物館開館 20 周年記念式典
・令和 4 年（2022）10 月 12 日、新図書館（第 3 代図書館）落慶式、10 月 17 日開館 (注 27)。⇒**開校 140 周年記念**
・令和 5 年（2023）第 92 回日本佛教学会学術大会開催予定
・令和 6 年（2024）第 85 回私立大学図書館協会総会研究大会開催予定
　第 59 回佛教図書館協会総会研究大会開催予定

《略号》
・『駒澤大学八十年史』（駒澤大学八十年史編纂委員会、1962 年）⇒『八十年史』
・『駒澤大学九十年史』（駒澤大学九十年史編纂委員会、1972 年）⇒『九十年史』
・『駒澤大学百年史』(駒澤大学百年史編纂委員会、1983 年) ⇒『百年史』
・禅文化歴史博物館大学史資料室『「図書館誌」にみる駒大図書館史』【その 1】～【その 6】（駒大史ブックレット 5～10）⇒【その 1】【その 2】～【その 6】等と略す。
・『藤田俊訓先生遺影』（後楽出版社、1976 年）⇒『藤田遺影』
・禅文化歴史博物館⇒《禅博》と略記
（＊なお、本稿では敬称はすべて省略する）

《記述 1》
　天正 8 年（1580）設立の飯高檀林を淵源とする立正大学、寛永 16 年（1639）の西本願寺内学寮に源を発する龍谷大学、寛文 5 年（1665）東本願寺内学寮を源流とする大谷大学なども本学と同様の歴史的展開を辿った大学といえよう。

《記述 2》

《禅博》大学史展示室特別展資料「駒沢移転 90 周年記念展―駒沢とあゆんで 90 年―」（展示会期：平成 15 年 9 月 24 日（水）～平成 16 年 4 月 23 日（金））を参照。同資料は次のように記述する。

> 駒沢校地を獲得したのは、明治 45 年（1912）年 4 月 11 日でした。この当時、荏原郡駒沢村大字深沢字狸谷（まみがや）と称していました。駒沢校地は、当初、小説家岡本かの子の父、大貫寅吉、つぎに、この地で養鶏場を経営していた郷力三郎、そして、移転直前には、喜多博が所有し、大沢謀が 3 千羽からなる養鶏場を営んでいました。移転当時の駒沢校地の周囲は、人家もまばらで、水田、畑、雑木林が一面にひろがる田園地域でした。大学の移転によって、薬局、銭湯、理髪店などの学生あいての店が開かれていきました。

校地の移転先として、現在の千葉県市川市国府台なども検討されたようであるが、最終的には「駒沢」の地に落ち着いた（『八十年史』第 3 章第 12 節「曹洞宗大学の移転問題」p84 を参照。対応する『百年史』は上巻 p317 参照）。

駒澤大学「自治の歌」（作詞：五十嵐黙雷、作曲：松島彝）の一番の歌詞、「<u>都の塵の渦巻を　北東隅に眺めつつ</u>　西はるばると千載の　富士の白雪うち仰ぎ　竹の波うつ駒沢の　空にそびゆる<u>自治寮や</u>」も当時の駒沢を彷彿とさせよう。「自治の歌」の制定は大正 10 年（1921）であり、制定の経緯は『第一義』第 25 巻第 7 号（1921 年）に詳しい。

それによれば、「自治の歌」の歌詞は学生からの公募だったようで、作詞者「五十嵐黙雷」はその当選者だった。なお、「自治の歌」はのちに「寮歌」と名を変え、歌い継がれた（上記の下線部の歌詞「自治寮や」が「学舎（まなび）や」に変更された。上記の下線は奥野）。以上については、『百年史』下巻第 4 編第 3 章「学寮」（p1774-1777）を参照。

ところで、本学が駒沢に移転した翌年の大正 3 年（1914）現在の駒沢公園に開設されたのが東京ゴルフ倶楽部であった。昭和天皇（1901-1989）はゴルフ好きであったことで知られるが、東京ゴルフ倶楽部と昭和天皇について、猪瀬直樹『ミカドの肖像』（『猪瀬直樹著作集』第 5 巻、小学館、2002 年）は次のように記す。

> ゴルフが上流階級に普及しはじめると当然、ゴルフ場についてのニーズが生じる。東京ゴルフ倶楽部ができたのは、大正三年。場所は、現在の世田

谷区駒沢（当時、荏原郡駒沢村）で、三万五千余坪に九ホールだった（同書、p118）。

猪瀬書は続いて「皇太子裕仁が初めてフェアウェイに立った大正六年は、まともなゴルフ場のない時代だった。大正三年にできた駒沢村ゴルフ場は日本最初の本格的ゴルフコースだったが、その内実はどうであったか」と述べて、故安田幸吉プロ（1905-2003）の証言を載せている。さらに「安田がキャディマスターをしていた駒沢の東京ゴルフ倶楽部で、皇太子裕仁と英国皇太子エドワード（プリンス・オブ・ウェールズ）のマッチプレイが行われたのは、大正十一年（一九二二年）四月十九日、よく晴れた日だった」（p121）とし、皇太子裕仁の〝英国御巡遊〟に対する返礼として日本を訪れた英国皇太子エドワード（プリンス・オブ・ウェールズ）と皇太子裕仁とのマッチプレイの様子を伝えている。

《記述 3》

校歌（北原白秋作詞、山田耕筰作曲）に「旃檀林　旃檀林」とリフレインされる。校歌の制定は昭和 5 年（1930）のことで、校歌制定については《禅博》展示資料「駒大校歌と北原白秋」（展示期間 : 平成 19 年 1 月 15 日～3 月 30 日）を参照。北原白秋・山田耕筰のコンビは、関西学院大学校歌、同志社大学学歌をはじめ多くの大学、高校の校歌・学歌の制定に関わった。このことについては、吉海直人「山田耕筰の偉業」（2020/04/28、山田耕筰の偉業 :: 同志社女子大学 (doshisha.ac.jp)）を参照。北原・山田のコンビは、校歌ばかりではなく、多くの企業の社歌制作にも携わっているが、その背景には当時の国威発揚も影響していたようである。本学の校歌もそうした環境下において生まれたのである。

《記述 4》

吉祥寺旃檀林、青松寺獅子窟、泉岳寺学寮が江戸三学寮として有名。三学寮については、《禅博》大学史展示室特集展 11 資料「江戸時代の旃檀林」（会期 : 平成 20 年 9 月 16 日～平成 21 年 3 月 31 日）を参照。

《記述 5》

高田儀光が昭和 10 年（1935）5 月 29 日に発行された「図書館報」第 1 号に寄せた「駒沢大学図書館の今昔」と題する一文は、本学図書館の歴史を見るう

えできわめて重要なものであるので中略をはさみながらも主要部分を以下に引用しておきたい。引用文中の番号と下線は私（＝奥野）によるものである。

「駒沢大学図書館の今昔」

館長　高田儀光

（前略）此の書庫（耐火煉瓦二階建十坪の書庫＝奥野補）は、大正元年に駒沢に移され今の仮講堂の位置にあったが、大正十二年の大震災の時、大講堂と同様に崩壊した。①図書館が日ヶ窪から駒沢に移る時、図書は縄で縛って荷車で運び、久しく物置に積んであった。満足な台帳も無かったので、良書の紛失せるものも少なからず、欠本が出来、一部屑紙として売られたとの風説も耳にした。

大正二年、余が最初の図書館長に就任し、図書掛一名行者一名と図書の整理と充実とに着手した。（中略）

②大正七年十二月、単科大学令の発布せられると同時に、時の学監大森禅戒師は単科大学を目標として着々準備をすすめ、その準備の一として図書の充実を図った。③大正十年衛藤教授が独逸へ留学したその時、マルクの相場が非常に安かったので盛んに独逸書を購入した。現存哲学方面の独逸書は多くこの時に購入したものである。④単科大学とするには、所蔵図書の数及び図書館の設備が必要条件なので、図書購入費を増額し、大正十四年書庫を建て、昭和三年現在の図書館を建てた。鼠の巣に比すれば大進歩である。併し由来本学の図書館は余り恵まれて居らなかった。（中略）

今は学的研究を標榜して居る大学である。東洋科もある、人文科もある。仏教科にも禅以外の教学がある、禅と図書とは全く没交渉否な背反するものの如く言う人もある。併し古聖先徳の遺された夥しき禅籍は何を語るか、用い方によっては幾分禅の修業に便あることを認めた上のことではないか。文科大学研究資料の大部分は図書である。

図書館は大学の心臓であるが、不幸にして本学の此の心臓は今や麻痺しかけている。外観は美でも、その内容は貧弱である。常に学生教職員の不満を耳にする所をみれば余の私見でなく、公論である。大学図書館として誇示出来ない、少くとも他の私立大学図書館に比して大いに遜色がある。その上経営上の困難から栄養不足に陥って居り、学校当局も大いに心配をしているが、如何にも止むを得ざる事情ではあるが決して本学の幸福でな

く閑却すべき問題ではない。大学における図書館の重要性を認めぬ人は、閲覧者の少なきことを挙げて其の不要を説く。閲覧者の少なきは蔵書の少ないことが一原因であるが、⑤已に蔵書六四〇〇〇冊に達して居る。諸先生の厚意による依託図書もある。利用の価値がないのではない、寧ろ図書館を理解せず、不案内なるに依るものが多いのではないか。本館が『館報』を発行する趣意は図書館の実状を紹介して、教職員学生の利用を促進し、宗門一般の理解を求め、本館が本学の心臓としての使命を果し得るの日を早うせんが為めである。

（昭和 10 年 5 月 29 日発行「館報」第 1 号所載。以上の引用は、『八十年史』p473-475 より）

下線部①は駒沢移転時の図書館の様子がわかり興味深い。下線部②③④からは「大学令」発令と同時に当時の学監大森禅戒（第 9 代学長、1871-1947）が図書の充実につとめていること、それは「大学令」が図書館の設備、すなわち蔵書数を条件としていたからであったことが読み取れる。特に洋書については当時ドイツに留学していた衛藤即応（第 16 代総長、1888-1958）に購入を依頼していたことがわかる。このことについては、【その 2】「備品の整備と洋書の収集」p5-6 を参照。特に下線部④は昭和 10 年当時、本学図書館には「64000 冊」の蔵書があったと伝えているが、このことについては《記述 6》においてあらためてふれたい。

ところで、『八十年史』には続いて「第 2 号以下、発刊し得ず終わったのであった」（p475）とあり、せっかくの「館報」も残念ながら第 1 号のみで終わったことを伝えている（対応する『百年史』は下巻 p1585）。

《記述 6》

大学令施行以前は、大学は法規上は「帝国大学令」に基づく「帝国大学」のみであった。それ以外の「大学」の名を有する高等教育機関は、すべて法規上は「専門学校令」に基づく専門学校であり、「曹洞宗大学」もその一つに過ぎなかったのである。

大学昇格の条件として当時の文部省は供託金の納入を求めており、その額は 50 万円で、そのうち第 1 回目に 25 万円を納入し、残りの 25 万円は 3 カ年に分納する決まりであったようである。そのほか鉄筋の教室、図書庫図書館、研究室、書籍など大学としての一定の水準の達成も求めていた。前記《記述 5》

も参照。

関連する「大学令」条文を示せば、次のとおりである。

第六条　私立大学ハ財団法人タルコトヲ要ス但シ特別ノ必要ニ因リ学校経営ノミヲ目的トスル財団法人カ其ノ事業トシテ之ヲ設立スル場合ハコノ限ニ在ラス

第七条　前条ノ財団法人ハ大学ニ必要ナル設備又ハ之ニ要スル資金及少クトモ大学ヲ維持スル足ル収入ヲ生スル基本財産ヲ有スルコトヲ要ス

基本財産中前項ニ該当スルモノハ現金又ハ国債証券其ノ他文部大臣ノ定ムル有価証券トシ之ヲ供託スヘシ

第八条公立及私立ノ大学ノ設立廃止ハ文部大臣ノ認可ヲ受クヘシ

学部ノ設置廃止亦同シ

前項ノ認可ハ文部大臣ニ於テ勅裁ヲ請フヘシ

ところで、大学昇格と私立大学図書館の対応に関するすぐれた研究に、呑海沙織「大正期の私立大学図書館：大学令下の大学設置許可要件としての図書館」（『日本図書館情報学会誌』第 56 巻第 1 号、2010 年）がある。残念ながら、同論文は「立正大学、駒澤大学、東京農業大学については、「参考書」が確認できなかったため、対象外とする」（p2）とし、本学は考察の対象にされていないが、大正末期までに設置された大学の認可時における蔵書数が示されており有益である。呑海論文によれば、「5 万冊以上を所蔵するのは、同志社大学、慶應義塾大学、早稲田大学のわずか 3 大学であり、1 万部未満所蔵のものが 8 大学」であった（p5、下線は奥野）という。ここで想起されるのが、《記述 5》において見たように、高田儀光が昭和 10 年の時点で本学図書館はすでに「64000 冊」を蔵していたとする点である。この記述をそのまま信用すれば、これがたとえ大学昇格後約 10 年を経た記述であるとしても（＝記録であることを差し引いたとしても）、本学図書館は他大学に比べてかなりの数の図書を蔵していたことになる。しかし、事はそう単純ではない。なぜなら、「図書館誌にみる駒大図書館史」【その 1】【その 2】には、大正 10 年（1921）および大正 12 年（1923）の蔵書数を記録して、次のようにあるからである。

・大正十二年十二月（ママ、大正十年の誤り＝奥野）の段階では、曹洞宗大学図書館には和漢書一万六千九百十三冊、洋書千四百七十冊、合計一万八千三百八十三冊の蔵書がありました。このうち、同年の購入図書は六百四十八冊、寄贈図書は七百四十九冊と、購入図書より寄贈図書が多か

ったことが分かります（【その 1】「蔵書の充実と寄贈図書」p12。対応する原文は p76）。

・その結果、同十二年十月には蔵書数も二万九百八冊となりました。この内、和漢書一万八千七百二十一冊、洋書二千百八十七冊でした（【その 2】「備品の整備と洋書の収集」p6。対応する原文は p60）。

当時の一年間あたりの増加冊数（約 1400 冊ほどか）を勘案すると、前の昭和 10 年時に「64000 冊」との記述は、にわかには信じがたい。あるいは誤記か誤植であろうか。この点については後考を期したい。「図書館誌」が冊数、蔵書数を記録しているのは、大正 10 年と大正 12 年のみであるから、当時図書館も大学昇格の要件として蔵書数を気にしていたことが窺われる。

ところで、呑海論文は「冊」と「部」の弁別が曖昧なようにも思われ、その点には課題が残るようにも感じた。しかし、「大学令」発令の背景をはじめ教えられる点が多く、同論文は非常に有益であった。その学恩に深謝したい。その他、管見に及んだ「大学昇格」に関する先行研究には以下のようなものがある。参考までに次に掲げておく。

・雨宮和輝「大学「昇格」による仏教系私学の教育目的・学部組織の変化―駒澤大学を事例として」（『関東教育学会紀要』第 43 号、2016 年）

・雨宮和輝「大学令下における仏教系私学の連合大学設立に関する考察―教育目的・学部組織の変化に着目して」（『早稲田教育評論』第 31 号、2017 年）

・浅沼薫奈『日本近代私立大学史再考―明治・大正期における大学昇格準備過程に関する研究』（学文社、2019 年。本書は著者の桜美林大学への学位請求論文の公刊）

《記述 7》

《禅博》大学史資料室による労作【その 2】によって、本学図書館の被害状況を見てみよう。以下は同史 p55 よりの引用で中略をはさみながら示す。なお、強調文字、下線は奥野による。

九月一日　理事第三四回の誕辰に遭遇し休務中、**突如大震災襲来**、<u>其結果大講堂全潰、寄宿舎南・北両棟共大傾斜、図書館書庫また大亀裂を生じ、其他貴賓室も幾分の傾斜をなし、建物全部に渉り壁の墜落せしもの数ふべからず、其惨状言語ニ絶す</u>、之が為就務始業何れも中絶す

四日　全潰せる大講堂中より仏像・仏具を掘出し、一時講師控室に安置す、行者雇老婆を指揮し図書館講師控室等の壁土駆除ニ従事、全身黄塵に包まる

十四日　昨夜の猛雨は書庫四隅の大亀裂より容赦なく侵入し丸濡れとなりしもの夥し、依て行者を督し之を運出乾燥に勤む、此日雲行悪しく時ニ驟雨到来す

十五日　書庫内の蔵書は何時迄も此侭に放任するを許さず、本日より光山副学監並ニ滞在中の奏者一同を煩はし大挙図書及び書架を閲覧室に運出す、一方大工をして破損書架の修繕を行はしむ

十六日　作務昨日の如く一同綿の如く疲る

十七日　激務三日、本日を以て書庫中の図書全部の搬出を了し漸く重荷を下す、之ニより第一・第二の閲覧室ハ臨時書庫となる

十八日　古雑誌、新聞、官報及試験用紙等の反古全部を売却す、眼蔵等の板木を運出、之にて書庫の品は悉く搬出し終る、十五日以来光山副学監・李成春・芳賀・柴田・山岸・吾郷・柳沢・星野・持田の諸君が理事の指揮に従ひ身命を惜まず、我館の為に尽くされし事を深謝す、本日午後館員祇樹朴翁君帰学

廿三日　館長来学され諸般の指揮を仰ぐ、過般売却の反古費全部を書庫移転に尽力せし八氏に頒与す

冒頭に見える「理事」とは、のちの《記述 11》《記述 12》に見る『禅籍目録』の実質的編纂者であり、のちに第 7 代図書館長となる小川霊道（1890-1965）のことである（小川を第 7 代図書館長とするのは本学図書館の内部資料による）。壊滅的建物被害の状況、その後の復旧のための作業、疲労の様子が手にとるように理解される。やむなく売却した資料の代金のすべてを図書館のために尽力してくれた学生に分配したとある記述には胸打たれるものがある。小川については、《記述 13》も参照。

当時の学監山上曹源（第 13 代学長、1878-1957）は、「九月一日の大震災は、最大級の形容詞の有りつたけを並べても、到底形容することの出来ない惨めさであった。謂はば大自然の偉力を言ひ表はすには、人間の作った言葉や文字は、餘りに貧弱なることが納得された訳である」という書き出しで始まる「現実の火宅」なる一文においてその惨状を伝えている（『第一義』第 27 巻第 11 号、1923 年）。また同誌上の一記者による「駒澤時報」は本学の甚大な被害状況を

克明に記録し、当時の状況を余すところなく伝えている。

関東大震災については、藤田俊訓も次のように述懐する。

私たちの学生時分の一番の思い出は、なんといっても、大正十二年九月一日の関東大震災である。雑誌をやっていたので（藤田が学内誌『第一義』の編集を手伝っていたのは「大正十一年以来、十四年三月迄」であったという。『藤田遺影』p107 参照。初出は『駒沢大学父兄会報』No39、1974 年。以上は奥野補）、夏休みを早く切り上げて上京したため、あの大震災に遇ったが、あの時の惨事は、いま思い出してもゾットする。時の光山覚音副学監を隊長として、七、八人で、三万余人が焼死している本所被服廠跡へお経をあげに行ったが、そのとき着ていたキモノに何日も屍臭が残り、食事のたびに思い出されて、ご飯が咽喉を通らなかった。（藤田遺影 p137-138。初出は『駒沢大学父兄会報』No13、1966 年）

ところで、本稿とは直接関係しないが、関東大震災の際の總持寺の修行僧たちがとった行動について、大曲駒村（1882-1943）の『東京灰燼記』（1923 年、東北印刷出版部）を引用して言及する大竹晋の記述をある種の感動をもって読んだ。いま、大竹の引用する『東京灰燼記』と大竹による記述をあえて紹介しておきたい。

但し、聞く処に依ると、其取扱の粗暴なる事、腐爛した死体を竿で突き集める。鈎で引き掻くと云ふやうな事も辞さないと云ふ。これを見兼ねた鶴見の總持寺の或る坊さん達が、

『むごい事をしなさるな。わし等に任せない。』

と云ふなり人々の中に割って入り、法衣の袖を捲り上げて皆々素手であの悪臭鼻を突く腐爛の死体を擡げ、ウンウン汗水になって指定の場所へ運び出した。これに感激した人々は、漸く竿を捨てて死体に親しく手を懸けることが出来たと云ふ事を、目撃して来た友人が余に語った。（大曲駒村〔一九二三：（灰燼余録）一八〕

死体を回収することは、坊さんたちと関わりないことであった。しかし、坊さんたちは駆け寄っていった。他者を救うために自己を顧みずに駆け寄っていった、そしてそれによって人々を人道に目覚めさせた。この名も知られない坊さんたちの内にあった利他心こそ、大乗ではなかろうか。（大竹晋『大乗非仏説をこえて―大乗仏教は何のためにあるのか』、国書刊行会、2018 年。p175-176。下線は奥野）

《記述 8》

《記述 5》に見たように、大森禅戒学監がすぐさま図書の充実に努めたことから明らかなように学内は大学昇格に積極的であったが、仏教各宗の間からは求められている供託金のような大金や設備を必要とするのであれば、むしろ各宗の「連合大学」を作ってはどうかという議が持ち上がった。これが「連合大学構想」である。当時の曹洞宗宗務院もこの構想に賛意を示したので、学内では猛烈な連合大学構想に対する反対運動が起こることになった。結果的には皮肉なことに関東大震災による建物被害が大学昇格への転機となる。以下に震災後の学内誌『第一義』の「目次」を示してみよう。

『第一義』第 28 巻第 2 号（大正 13 年 3 月）―昇格促進運動―（以下のカッコ内は奥野の補い）

信徒の立場より	永松為治郎氏
仏教教育と昇格	小柳文学博士（小柳司気太）
特色ある大学の建設	忽滑谷大学長（忽滑谷快天）
宗門の興隆と昇格	佐川教学部長（佐川玄彝）
昇格に就ての御垂示	新井管長猊下（新井石禅）
学府の独立	森法学博士　（森荘三郎）
連合大学の空想を駁す	中根大学教授（中根環堂）
昇格と学生	藤田学生代表（藤田俊訓）

天野郁夫はその著『高等教育の時代（上）』（中公叢書、2013 年）において、上掲の『第一義』から以下の一文を引用して「連合大学」について説明しているが、『第一義』を点検してみるとこの文は中根環堂（第 12 代学長、1876-1959）のものであることがわかる。

「宗教は各々其の目的に達する道を異に」している。宗派間で「何等の衝突もなく、撞着もな」いというのでは、宗教ではない。連合・合同が難しいのが宗教・宗派というものである。「宗教が聯合できず、宗派が合同できないとするならば、其宗旨の根本精神を養成する大学も聯合できない筈である。（中略）一歩を譲って、各宗派の合同は兎も角として、大学のみ聯合し得るとしても、其学校の精神は何宗旨に依て養成すべきか。換言すれば、校風はどの宗風に憑（よ）るべきか。（中略）空想というよりも寧ろ幽霊に等しい聯合大学を今頃吾宗門に主張するものありとすれば、是れ曹洞宗大学の昇格に唯単に反対せんが為に反対するものか、否らざれば、

無理解なる馬鹿者である。（天野書、p90）

「昇格問題」「連合大学構想」については、『八十年史』第 4 章第 2 節「昇格問題」p295-336 に詳しい（対応する『百年史』は上巻第 1 編第 6 章第 4 節「単科大学への昇格運動」p329 以下）。以下に引用する記述を読むと当時の学生の「大学昇格」に向けた熱意が伝わってくると同時に本学が「大学」となるにあたっては、こうした学生および全国の曹洞宗寺院さらには多くの檀信徒の助力があったのだという思いをいまさらながら強くする。

学生は休暇を利用して、出身の県において興隆会の寄附を頼みに歩いた。大学では学長をはじめ各教授が半折に書を書いて、寄附を完納してくれた寺院に与えるようにした。これも幾回も行なわれたが、大正十三年の三月の休暇には、学生の熱意が白熱化し、出身県の勧募に歩いたものである。かくして二、三人で県下を歩き、泊りがけで依頼し、残雪の峠を越え、広野を横ぎり、村から村へ、町から町へと寺院を尋ねて教授の書を携えて巡回した。学生の熱情に対して地方の各寺院もこれに呼応し、進んで寄附を申し出たものも多数あった。中には、既に集めながら銀行に預け様子を見ていたものもあったようだ。しかし、学生の純真な心情はこうした人々を動かし、寄附の額も日増しに上昇していった。こうして、供託金も集まり、大正十四年の三月には、文部省もいよいよ昇格を認可するようになった。（引用は『八十年史』p311-312 より）

なお、「連合大学構想」する立正大学、大正大学の対応については、『立正大学の 140 年』「3 旧制大学への昇格から戦禍の大学へ」（学校法人立正大学学園、2012 年。特に p64-65 の「仏教連合大学構想」）および影山昇「沢柳政太郎と大正大学―仏教連合大学の初代学長―」（『成城文藝』第 175 号、2001 年）を参照。ちなみに大正末期までに「昇格」を果たした「大学」は次の 22 大学であり、その最後となる大正大学は宗教大学（浄土宗）、天台宗大学（天台宗）、豊山大学（真言宗豊山派）を設立母胎とする「連合大学」であった。元号名をとって「大正大学」と命名された理由については続く《記述 9》を参照。

大学令による大正期の私立大学（下線は仏教系大学）

大正 7 年（1918）大学令発令

大正 8 年（1919）大学令改訂・公布

大正 9 年（1920）

1）慶應義塾大学　（大正 9 年 2 月 20 日：財団法人慶應義塾大学）
2）早稲田大学　（大正 9 年 2 月 20 日：財団法人早稲田大学）
3）中央大学　（大正 9 年 4 月 12 日：財団法人中央大学）
4）日本大学　（大正 9 年 4 月 12 日：財団法人日本大学）
5）法政大学　（大正 9 年 4 月 12 日：財団法人法政大学）
6）明治大学　（大正 9 年 4 月 12 日：財団法人明治大学）
7）國學院大学　（大正 9 年 4 月 12 日：財団法人皇典講究所）
8）同志社大学　（大正 9 年 4 月 12 日：財団法人同志社）
大正 10 年（1921）
9）東京慈恵医科大学（大正 10 年 9 月 27 日：財団法人東京慈恵医会）
大正 11 年（1922）
10）立教大学　（大正 11 年 5 月 10 日：財団法人聖公会教学財団）
11）龍谷大学　（大正 11 年 5 月 10 日：龍谷大学財団）
12）大谷大学　（大正 11 年 5 月 10 日：真宗教育財団）
13）専修大学　（大正 11 年 5 月 10 日：財団法人専修大学）
14）立命館大学　（大正 11 年 5 月 31 日：財団法人立命館）
15）関西大学　（大正 11 年 5 月 31 日：財団法人関西大学）
16）東京教会大学　（拓殖大学、大正 11 年 5 月 31 日:財団法人東洋教会）
大正 13 年（1924）
17）立正大学　（大正 13 年 5 月 17 日：財団法人立正大学）
大正 14 年（1925）
18）駒澤大学　（大正 14 年 3 月 30 日：曹洞宗教育財団）
19）東京農業大学　（大正 14 年 5 月 18 日：財団法人東京農業大学）
大正 15 年（1926）
20）日本医科大学　（大正 15 年 2 月 25 日：財団法人日本医科大学）
21）高野山大学　（大正 15 年 4 月 20 日：高野山勧学財団）
22）大正大学　（大正 15 年 4 月 20 日：仏教教育財団）

《記述 9》

大学令第 2 条に「大学ニハ数個ノ学部ヲ置クヲ常例トス但シ特別ノ必要アル場合ニ於テハ単ニ一個ノ学部ヲ置クモノヲ以テ一大学ト為スコトヲ得　学部ハ法学、医学、工学、文学、理学、農学、経済学及商学ノ各部トス」とあるよう

に「仏教学部」は認めれていなかった。つまり、文部省の意向で宗派名などを大学名に冠することは認められなかったので、「曹洞宗大学」は校地のある地名をとって「駒澤大学」と改称されたのである。この点については、関口雅夫「駒澤大学の「建学の精神」についての史的考察」Ⅰ・2「時の政府による「建学の精神」廃止の強制」（『駒澤法学』第 4 巻第 1 号、2004 年）が参考になる。

《記述 10》

山上曹源学監は「昇格した暁に於る曹洞宗大学の内容」において、次のように述べて昇格以後の本学の指針を示している。重要なことゆえ、煩を厭わず引用してこれを示しておこう。

曹洞宗大学が昇格して、謂ゆる大学令に依る単科大学となった暁は、其の学科組織の内容は何ういう風になるか？と、書面や口頭でお尋ねになる方が少なくありませんから、茲にその概要を述べてみたいのであります。

我が曹洞大学（ママ、曹洞宗大学＝奥野補）が昇格した暁は、現在の学科組織の内容をば、少なくとも三倍した位の大きさとなるのであります。即ち専攻学科が、

（一）仏教学科

（二）東洋文学科

（三）人文学科

の三部門に分かれるのであります。が、此等の三専攻学科は、何れも曹洞宗の宗乗たる禅学を以て核心とし､生命とするやうに組織だてゝあります。

世間の大学では、帝国大学を初め、何れの大学に於ても、たゞ学問の蘊奥を研究せしむるを以て、目的としゐるのでありますが、我が曹洞宗大学では、学術の研究は勿論、禅的に人物を鍛へあげて、真に国家社会の為に働く人を打出することに重きを置いてゐるのであります。

熟々我が国民の間に於ける、謂ゆる有識階級の状態を観察するに、智識の発達せる人は少なくないやうでありますが、人物の立派な人は極めて稀であります。換言せば、現今の日本帝国には、頭脳の発達せる人は沢山ありますが、しっかり腹の据った人は暁の星よりも少ないやうであります。然るに国家は、今や有ゆる方面に於いて、頭の人より腹の人を要求してゐるのであります。即ち智者学者よりも、常識に富んだ人格者を要求してゐるのであります。これ我が曹洞宗大学が、他の諸大学と趣を異にして、人

格の完成、人物の陶冶に重きを置く所以であります。

既に単科大学として、大学令に依って、大学といふ名実相応のものを設立するからには、従来の如く、宗門僧侶の養成ばかりでなく、世間一般の学生をも収容して、謂ゆる外護の菩薩を養成し、外護の善智識を作り出すのは、固より当然のことであります。（中略）

で、第一の仏教学科では、仏教専門の学者及び弘教伝道家を打出するのを眼目とし、第二の東洋文学科では、国語及び漢文の学者を作り、主として高等学校若くは中等学校の教員たらしめ、第三の人文学科では、社会学及び経済学を中心として、高等普通学を授け、主として新聞雑誌の記者並に経営者を養成することゝなって居ます。そして此等の三部門に於いては、前にも一言せるが如く、禅的信念を以て一貫するやうに組織づけ、何れの専攻学科を修むる学生も、禅的に鍛ひ上げるやうに仕組むのであります。

（『第一義』第 28 巻第 8 巻、1923 年 7 月、p5-6。下線＝奥野）

戦前、戦後の一時期、社会から「国漢の駒澤」「地歴の駒澤」と称えられたと聞くが山上の目的は概ね達せられたといえよう。また、「従来の如く、宗門僧侶の養成ばかりでなく、世間一般の学生をも収容」する大学になることを求められ、それを目差したがゆえに《記述 8》に見たように宗派に関わる名を「大学」に冠することは認められなかったのである。

《記述 11》

菅原榮蔵（1892-1967）については、【その 4】「美術建築士菅原榮蔵」を参照（p6）。また、菅原の子息菅原定三に『美術建築士・菅原栄蔵』（住まいの図書館出版局、1994 年）がある。なお、菅原は設計ばかりでなく、書架や館内の調度品の決定にも関わっていたことは【その 3】「新書庫および本館閲覧室の建設」p7 を参照。さらに《禅博》HP の次の記事も菅原の設計に込めた思いを知るうえで参考になろう。

歴史的建造物「耕雲館」| 禅文化歴史博物館 | 駒澤大学 (komazawa-u.ac.jp) を参照。

また、《禅博》では 2013 年 10 月 19 日、建築史家の谷川正巳氏（元日本大学工学部教授）を招き、第 31 回禅博セミナーとして「いま建築が面白い～駒大図書館と菅原榮蔵」と題する講演会を開催している。

《記述 12》

昭和 3（1928）年 3 月の図書館（図書閲覧室兼研究室）竣工に合わせて刊行されたのが、初代館長高田儀光を編纂代表とする『禅籍目録』である。高田館長を編纂代表とはするものの、実質的にその編纂刊行に大きく関わったのが小川霊道（1890-1965）であった。

小川はのちに昭和 17 年（1942）から昭和 35 年（1960）までの長きにわたって、第 7 代図書館長を務め図書館の充実につとめた。その小川が『禅籍目録』の修訂・追補版として開校 80 周年にあたる昭和 37 年（1962）に刊行したのが『新纂禅籍目録』（駒澤大学図書館、1962 年）であった。同書の刊行により、本学図書館は翌年の昭和 38 年（1963）、私立大学図書館協会より同年度の協会賞を授与される栄に浴している。『禅籍目録』については、拙稿「駒澤大学図書館と『禅籍目録』」（『駒澤大学仏教学部論集』第 49 号、2013 年）を参照されたい。

昭和 3 年 3 月の図書館落成式に出席した来賓には、『禅籍目録』や図書館を設計した菅原榮蔵の作成になる絵葉書、「明治以後刊行禅籍目録」が配布され、昼食にはいまも日本橋にある「弁松」の弁当が出されたという（【その 5】「図書館の落成式」p5 を参照）。なお、『禅籍目録』以前には、各宗の大学により次のような目録が相次いで刊行されているが、これらはすべて「大学昇格」に関わる学的成果として競って刊行したものではないかと思われる。

・日蓮宗大学編纂部編『日蓮宗宗学章疏目録』（須原書店、1918 年）
・大谷大学図書館編『大谷大学図書館和漢書分類目録』（大谷大学図書館、1925 年）
・龍谷大学図書館編『龍谷大学和漢書分類目録』（龍谷大学図書館、1926 年）
・高田儀光編纂代表『禅籍目録』（駒澤大学図書館、1928 年）

《記述 13》

小川霊道については、【その 4】の「図書館誌と小川霊道」（p4-5）を参照。なお、駒澤大学内禅学大辞典編纂所編『禅学大辞典』は特に「小川霊道」「禅籍目録」の項を立てて解説し、その功績を称えている。いまは『新版禅学大辞典』（大修館書店、1985 年）の頁数を示しておく。「小川霊道」（p128）、「禅籍目録（新纂禅籍目録）」（p693）。小川は『禅籍目録』のほかにも本学図書館に独自の十進分類法を確立するなど大きな功績を残した。足かけ 18 年にもおよぶ図書館長として在任が何よりもそのことを雄弁に物語っているといえよう。

《記述 14》

初代学部長は大学昇格の際に『第一義』に「学府の独立」を寄稿した森法学博士、すなわち森荘三郎（1887-1965）であった。森は曹洞宗大学時代の大正 7 年（1918）から本学に出講している。森は東京帝国大学卒業と同時に同大学に奉職し、二度にわたって学部長（1931～1933、1940～1944）を務めた斯学における大家であった。森は笠森傳繁（1887-1970。第 2 代商経学部長。本学への出講は大正 13 年から）とともに本学の発展に大きく貢献した。本学は両人に対し、大学葬をもってその功に報いている。『九十年史』第 4 章「大学葬」（p530-538）を参照。なお、森および笠森については、山内舜雄『続道元禅の近代過程』第 9 章「曹洞宗大学林の終焉」（慶友社、2009 年。p124-128）および遠藤孝「経済学部 40 年在籍記―発展の軌跡とそこにある諸問題―」（『駒沢大学経済学論集』第 32 巻第 2・3・4 号、2000 年。特に p2-5）を参照。

ところで、本学はこのとき商経学部とともに同時に法政学部の開設も企図したが十分な教員と教場を揃えることができず断念せざるを得なかったという（『八十年史』第 6 章第 4 節「学部学科の構成」p376。対応する『百年史』は上巻 p460）。

《記述 15》

《記述 8》で見た「昇格促進運動」を報ずる『第一義』に「昇格と学生」を寄せた「藤田学生代表」が藤田俊訓（1898-1975）である。藤田については、『藤田遺影』を参照。以下、同書を中心に藤田について記してみたい。

明治 31 年（1898）佐賀県神崎郡城田村光円寺住職の父亮雄と母センの長男として出生した藤田は、苦学して大正 14 年（1925）曹洞宗大学を卒業した。卒業後、ただちに曹洞宗宗務院に務めるもほどなく帰郷し、宗侶として活躍するが、昭和 7 年（1932）山口県多々良学園学監を経て、港区元麻布の興国山賢崇寺住職となった。賢崇寺は佐賀鍋島藩ゆかりの寺で住職になるにあたっては、のちに本学学長を務めた立花俊道（第 10 代・第 14 代学長、1877-1955）の推輓があったという（『藤田遺影』p410 参照。なお同書 p354 では立花とともに山上曹源の推輓もあったと伝える）。ちなみに立花も山上も藤田と同じく佐賀県出身であり、また本学の誇る世界的仏教学者水野弘元（第 22 代総長、1901-2006）も同県出身であった。私は本学にはかつて職員も含めて「佐賀閥」があったと聞いたことがあるが、前述の名前に接するとさもありなんと思う。それ

はともかく、このあと藤田は世田谷学園教頭、駒沢女子学園学監、曹洞宗宗務庁庶務部長、同社会部長、同審事院（審事院は宗内における懲戒事犯等があったときに、その調査・監査・審判および調停を行う機関＝曹洞宗 HP「機構」より）審事を歴任した。

審事院審事であった昭和 33 年（1958）3 月、当時の衛藤即応総長の強い要請を受けて藤田は審事院を辞し、本学学監に就任する。藤田に期待されたのは、当時本学の大きな懸案となっていた旧制の学位授与問題と渋谷校地の処分の問題であったという。このことは藤田自身が述懐しており（『藤田遺影』p12、p13、p101-102、p105 を参照）、また同書中の谷北俊竜氏の証言もこれを裏書している（『藤田遺影』p372 以下を参照）。

本学で天台学を講じていた山内舜雄（1920-2013）は、前掲の『続道元禅の近代過程』第 8 章において藤田を次のように評している。

> 藤田俊訓は、戦後の高度成長期の波に乗り、学監として十余年董して、二千数百名にすぎなかった学生数を、なんと二万五〇〇〇名まで発展させた、その人だったのである。（中略）俊訓の重厚にして果敢な展開が、現在の駒澤大学を今日あらしめた功績は万人の認めるところ、（後略）」（同書 p107）。

山内書に見るように藤田は昭和 50 年（1975）2 月 25 日、78 歳で遷化するまで学校法人駒澤大学の運営を事実上一人で指揮し、“駒澤天皇”の異名をとった（『藤田遺影』p 425 参照）。いまではその名前を知る教職員も少なくなってきたが、本学の歴史を語るうえではけっして忘れてはならない人物といえるであろう。

さて、『八十年史』第 6 章第 12 節「商経学部第二部の開設と渋谷分校」（p398-401。対応する『百年史』は上巻 p472-474）によれば、曹洞宗教育財団が当時の農林大臣広川弘禅（1902-1967）の仲介斡旋により渋谷大和田町に校地を取得したのは昭和 26 年（1951）のことであった。本学は同地で昼間は付属高校の授業を行い、夜間は商経学部の第二部を開設して（認可は昭和 27 年 6 月、初代第二部長は笠森傳繁）校勢の拡大を図ろうとしたが、校地が狭小だったことや歓楽街に近かった等の理由により思うような校勢の拡大は果たせなかった。『八十年史』に始まる“正史”はこの間のことは簡略に記すのみであるが、『藤田遺影』は藤田自身の述懐とともにさまざまな証言を伝えている。いまそれらを私なりに要約して摘録すれば、次のとおりである。

・渋谷校地は昭和 26 年（1951）2 月、坪当り約 8000 円で購入した。当時、藤田は曹洞宗宗務庁社会部長であった（p16）。
・昭和 36 年 2 月 6 日、同校地は野村不動産に 3 億 4425 万円で売却された（坪当り 75 万円）（p18）。
・売却先が野村不動産に決まるまではさまざまな経緯があったらしく、藤田は「俺は殺されるかも知れない」（p375）、「オレは下村事件みたいに殺されるぞ……といって毎朝六時にタクシーで雲がくれ、つまり逃げて」（p431）いた。
・第 19 代総長を務めた榑林皓堂（1893-1988）は「私だけが知っている話」とする述懐の中で、「これはくわしく申し述べることは支障があるから差控えるが、愛知学院大学ならびに鶴見大学の歯学部設置の際における先生の太っ腹の支援だった」（p314）としているのは、どうやら渋谷校地売却の資金が絡んでいたらしい（p365-366、p375-376、p431 を参照）。

いまその検証と論評はあえて控えるが、ただただそういう時代だったのだと思うばかりである。ともあれ、渋谷校地の売却によって得た資金が以後の本学の発展を支える原動力となったことは間違いない。話は前後するが、昭和 33 年藤田が着任した当時の本学の財政は教職員の給与も支払えないほど困窮したものであったらしく、そうした状況にあって藤田がまず着手したことは《記述 8》の「大学昇格」時と同じように全国の曹洞宗寺院や同窓生に寄附を募るための「学寮・研究室・体育館等建設委員会」の設置であった。時に昭和 34 年（1959）5 月、目標金額は 1 億 3 千万円であったという（『藤田遺影』p47、初出は『開校八十周年記念行事小冊子』1964 年。他に p67、69 を参照。また『百年史』上巻第 1 編第 9 章第 3 節「施設の拡充」p478-481 を参照）。

さて、古庄正が『こまざわ経済通信』第 26 号（2001 年 3 月 3 日付）において、次のように記しているのも“駒澤天皇”としての藤田の一面、そして当時の本学の実態を伝えていて余りがない（ここに出る吉沢文男については、永田正臣による「吉沢先生を偲んで」『駒澤大学学園通信』第 100 号、1980 年 7 月および遠藤孝「吉沢文男先生追悼号の発刊にあたって」『駒沢大学経済学論集』第 12 巻第 2・3 合併号、1981 年を参照）。

駒澤大学では、教学問題を含めてあらゆることが、曹洞宗宗務庁により任命された大学当局（総長・理事長・学監・教務部長・学生部長等）によって決定されていた。吉沢文男先生は、駒澤大学のこうした非民主的な機構

を厳しく批判し、その改革を主張された数少ない教員の一人であった。先生は待遇改善の問題にも尽力された。駒澤大学の賃金は都内最低といわれるほど低かった。ある日先生は、意を決して実力者藤田俊訓学監（後に副学長）を訪ね、賃金の値上げをお願いした。しかし、学監の回答は「金に困るのなら奥さんに下宿屋でもさせたらどうか」というすげないものだった。

こうした一方、おそらくは藤田とは対極的立場にあったと思われる遠藤孝が「別の機会（在外研究時？＝奥野補）には学監藤田俊訓から大枚の餞別をもらい、お返しにドイツから総体振りの柱時計を贈り、大変喜ばれたりもした。藤田は大権力者で、個性が強く、民主派からは多く批判された人物であったが、不思議に遠藤とは波長が合い、藤田死去の報を聞いたときには、賢崇寺の階段を駈け登り、最後の姿に対面したりもした」（前掲遠藤「経済学部 40 年在籍記―発展の軌跡とそこにある諸問題―」p12）と述べているのは藤田の懐の深さを感じさせよう。

それはともかく、藤田が他方、力を尽くしたのが運動部、とりわけ野球部を使っての広報活動であった（「広報活動」という言葉を使っては語弊があろうか。不適当な場合は許されたい）。藤田は次のように述べる。

駒沢大学は単なる仏教の大学と思い、僧侶になる者だけしか入れぬと思っている人が殆どであることが判り、宣伝不足であることも教えられた。そこでピーアールのためにも一方、野球や柔剣道・空手道等を強くし、各種クラブ活動を盛んにし（以下略）（『藤田遺影』p105。初出は『駒沢大学父兄会会報』No39 号、1974 年）。

こうした藤田の期待に応え、昭和 37 年（1962）初めて東都大学野球リーグ戦を制した野球部は、同 39 年（1964）には全日本大学選手権においても初優勝し、今日に至るまで太田誠（監督就任は 1971 年）とともに大学野球界にその名を轟かせることになった。また、全日本選手権および世界選手権を制した空手道部の大石武士の活躍も見逃せない。

さて、図書館に対する藤田の貢献としては、金沢庄三郎（1872-1967、元文学部長）と永久岳水（俊雄）の旧蔵本の受入があげられる。言語学者である金沢の旧蔵本は永平寺から寄託されたもので金沢の号をとって「濯足文庫」として、『正法眼蔵』の写本研究で知られる永久のそれは「永久文庫」として所蔵され、研究者を裨益している。所蔵の経緯については、『藤田遺影』p186-187

を参照（初出は『好来会誌』第 14 号、1974 年）。

藤田については、その「ヌル風呂談義」等（このことについては、若月正吾「人生・人との出会い」『駒澤大学仏教学部論集』第 20 号、1989 年を参照）、まだまだ記すべきことがあるが、紙幅の関係ですべて省略せざるを得ない。しかし、最後に次のことだけはどうしてもふれておきたい。藤田の住した賢崇寺が佐賀鍋島藩ゆかりの寺であることはすでに述べたが、昭和 11 年（1936）2 月 26 日に起きた「2･26 事件」の皇道派の蹶起将校には香田清貞（陸軍歩兵大尉、1903-1936）はじめ佐賀県出身者が多かったところから、藤田は処刑された関係者の遺骨を引き取り、慰霊につとめたことでも知られている。長らく遺族の集まりである仏心会の代表を務め、この事件に関する多数の著作もある河野司（1905-1990）は、『藤田遺影』に「藤田老師と二・二六事件」なる一文を寄せ、藤田末期の様子を記しているが（河野が藤田を最後に見舞ったのは 2 月 22 日であったという。p350）、その筆致は胸に迫るものがある。藤田と「2･26 事件」についてもいまは詳細を省略せざるを得ないが、ここでは藤田を題材として描いた「号令と読経」ほか 5 篇よりなる、もりたなるお『鎮魂「二・二六」』（講談社、1994 年）を紹介するのみにとどめておきたい。

藤田が横浜市立大学病院において世寿 78 歳で遷化したのは、昭和 50 年（1975）2 月 25 日（奇しくも 2 月 26 日の前日）であった。藤田の功績に対し、本学は同年 2 月 5 日、正力松太郎以来の名誉文学博士を授与し（第 2 号、総長槫林皓堂）、曹洞宗管長（岩本勝俊）は 2 月 8 日付をもって駒澤大学名誉総長に任じている。また、永平寺貫首佐藤泰舜は 2 月 25 日付で「本山顧問」を委嘱し、また同じく同日付で總持寺学園主・總持寺貫首岩本勝俊は学校法人總持学園の名誉学園長の称号を授与している。さらに本学は同年 3 月、これまでの藤田の功績を称えて、日展審査員であり本学の三尊仏を彫刻したことでも知られる難波孫次郎の作になる胸像を贈呈している。賢崇寺と本学による合同葬、賢崇寺二十九世中興英学俊訓大和尚の本葬が勤修されたのは 3 月 3 日のことであった（遺弟、藤田俊孝師）。なお、私は本学の建学の理念とされる「行学一如」を鼓吹したのも藤田であると見ており、このことについては別稿を期したい。

藤田は建物（校舎等）ばかりでなく、父兄会（いまの教育後援会）、駒沢会、同窓会、奨学金制度等、現在の本学の主要な制度の基礎も作っている。藤田没後、まもなく 50 年、そろそろ大学史における藤田の本格的位置づけがなされる時期であると思われる。

《記述 16》

学監とは今風に言えば事務総長あるいは事務局長といったところであろう。ちなみに山内前掲書は次のようにいう。「学監と云う職名は、私大ではよく用いられる前例があるが、本学では戦後まで、昭和四〇年代の後半まで用いられていたのは、藤田俊訓学監に見るが如くである。ありていに言えば、実質上の理事長として経営一切を取りしきる一方、あるかなきかの教授会人事を掌握し、文字どおりワンマン経営の独裁者の如き権限を行使できるのが、学監であり、その適・否によって私大経営の存・否が左右される。経営全体まですべてを背負わねばならぬ私学においては、このような存在を必要としたと云えばそれまでだが、その全責任を背負わねばならぬ学監職は、常人では勤まらぬ。大力量の人物の出現を必要とする」（前掲山内書、p123）。本学の職制変更により、「学監」は昭和 46 年（1971）に「副学長」と呼ばれるようになった（『藤田遺影』「年譜」p440 は昭和 44 年のこととするが、いまは『百年史』下巻「付録」p1855 の記述にしたがった）。

《記述 17》

80 周年記念事業としてさまざまなことが行われたが、特筆すべきは文化面では『新纂禅籍目録』の刊行、施設面では 3 号館（体育館＝講堂）の新築、図書館関係では鉄筋 4 階建の書庫の増築が上げられる。学生数の増加に伴い、購入図書が増え、書庫狭隘化が進むのはいわば必然で、図書館は以後年々書庫狭隘化に苦しむことになる。その解消のために続く 90 周年記念事業として新図書館建築の構想が持ち上がるのもこれまた必然のことであった。

ところで、3 号館（体育館＝講堂）新築にあたって、『藤田遺影』は次のような興味深い事実を伝えている。

> 建蔽率四割の本学敷地内では、最早これ以上の建築は無理で、然も住宅専用地区の指定をうけている此の地区では二十メートル以上の建物は禁止されており、本学が希望する体育館の様な大建築は到底不可能と云うことになったのである。所がオリンピック東京大会が近づくにつれ、体育館不足に悩んでいたオリンピック東京委員会としては、オリンピック第二会場の駒沢公園に隣接する完全設備の駒沢大学体育館は非常な魅力で、<u>都条例其の他の一応の法規はあっても此の際特別の措置を講じて貰う様尽力するから是非つくって貰いたい</u>、そして世界各国バレー選手の練習其の他に提供

してくれる様にとの事であった(p48。初出は「開校八十周年祝賀記念誌」序)。

本学はいまさまざまな建築規制、取り除かなければならない建築法規上の問題を抱えていると聞くが、その淵源はもしかしたら上記 3 号館建築時に遡るのではないかと思われる。「特別の措置」がいまに影響しているとすれば、何ともやるせないことである。なお、3 号館（体育館＝講堂）をはじめこの当時の建築物については、『九十年史』第 1 章第 3 節「校地購入および建築の記録」p79 を参照（対応する『百年史』は上巻第 1 編第 10 章第 4 節「校地購入および建築の記録」p541-542)。

《記述 18》

読売新聞社社主正力松太郎に名誉博士号を授与することになった経緯については、『正力松太郎氏に名誉文学博士を贈る記』（駒澤大学、1962 年）に収められた藤田俊訓の「序にかえて（正力博士誕生)」に詳しいが、正力と本学の間には特別な関係があったわけではないという。藤田は「正力先生と駒沢大学とは別に大した特別の関係はない。先生の「禅と念仏」は本学教化研修所編となっているが本大学が直接参画した訳ではないし、又野球グランドの事ではいろいろ先生の特別の御配慮を煩わしたが、之は結局外に適当な地が見つからなかったのでそれを購入したし、又別に先生から一銭の寄付を貰ったこともない。言わば先生は本学にとり全く無縁と云えば無縁の方である」（p27）と述べている。にもかからず、正力に授与することになったのは、正力の名声に預かって、本学の名を広めようとする意図があったのでないかと推察される。それはともかく、昭和 37 年（1962）4 月 10 日に行われた名誉博士学位記贈呈式の次第は次のごとくであった。

保坂玉泉総長の式辞
荒木万寿夫文部大臣祝辞
宮本正尊日本印度学仏教学会理事長祝辞
金剛秀一曹洞宗宗務総長祝辞
正力松太郎先生挨拶並に記念講演
　演題「禅と私の体験」

また、当日夕刻より東京會舘で行われた祝賀レセプションの次第は、

保坂玉泉総長挨拶
池田勇人内閣総理大臣祝辞

宗教界代表　古川大航妙心寺派管長祝辞
学界代表　茅誠司東京大学総長祝辞
財界代表　石坂泰三経団連会長祝辞
正力先生謝辞
山田三良学士院長乾杯の言葉

となっている。まさに当時の日本の政財界、学界の錚錚たる顔が並んでおり圧巻である。私見はこうしたいわば「権威」を借りることによって、本学の名を世に広めようとする意図があったものと推察するのである。

ところで、本学図書館には『正力松太郎講演集』（図書館請求記号：073. P67）なる冊子が所蔵されているが、これを紐解いてみると、いずれも読売新聞社発行になる「正力社主の名誉文学博士記念講演・禅と私の体験」「私の坐禅体験を語る」「世界に稀な大発行部数　新聞は社会の公器である」の 3 部のパンフレットを 1 冊にしてボール紙で仮製本したものであった。裏表紙には「昭和 37.9.10　桜井秀雄寄贈」と刻印されているから、これは当時の図書課長桜井が合冊して寄贈したものであろうと推察される。この中、「正力社主の名誉文学博士記念講演・禅と私の体験」には、正力の本学における講演と東京會舘での池田首相等の祝辞が掲載されているが、これを駒澤大学編の上掲のそれと対照してみると若干の文字の出入りがある。例えば、駒澤本にある池田首相の祝辞冒頭の「次に多分、吉田茂先生も、あり（ママ）やコロンビア大学の名誉法学博士だから多分おやりになると思いますが、あの方はおしゃべりになりませんから、代って二人分をしゃべらせていただくことにいたします」は読売本にはない。東京會舘の祝賀レセプションには吉田元首相（1878-1967）も出席して祝辞を述べる予定であったとされるが、元首相は会場に姿を見せなかった。あるいは読売本は吉田元首相に配慮したのかしれない。吉田が姿を見せなかったのは、もしかしたらまだ広川弘禅との確執があったからだと想像するのは私の邪推というものであろうか。

なお、同年十月十五日の「開校八十周年大式典」においても、正力は記念講演を行っているが、その次第は次のとおりであった。

高階瓏仙管長猊下
丹羽廉芳永平寺別院監院
松浦英文總持寺監院
文部大臣灘尾弘吉（代理）

読売新聞社正力松太郎　講演「無我の精神と私の体験」
私大連盟代表上野直蔵同志社大学学長

《記述 19》
『九十年史』第 1 章第 3 節「校地購入および建築の記録」に「図書館書庫増設」に「学部増設とともに蔵書類が増加し現在の書庫（昭和三年落成）では手狭になったため約十万冊収納のめどで（以下略）」で書庫が建設されたことが記録されている（p76）。後文には「鉄筋ブロック造り四階建で七五六平方米で昭和三十八年七月十日に完成した。各々の入口および窓等は防火のためスチールシャッターを取付け安全をはかっている。さらに昭和四十五年四月二十七日書庫が再度手狭になったため書庫の一階にあった管理室を急きょ書庫に変更して、軽量プレハブ造二一二平方米二階建の管理室を隣接して建設し現在そこで事務を行っている」（同前。対応する『百年史』の記述は下巻 p1595 にあるがその記述は『九十年史』に比べ簡略になっている）とある。当時の書庫狭隘の様子が見てとれよう。この書庫は、昭和 48 年第 2 代図書館竣工にともない 10 号館として教場に転用された。10 号館は私の学部、大学院時代にあたる昭和 50 年代は確か大学院の演習室として使用されていたように記憶する。第 2 研究館の建設によって、10 号館は昭和 61 年（1986）取り壊されたが、建物のそば（耕雲館の裏）にあった枇杷の木とともに懐かしく思される。

《記述 20》
このことについては、【その 5】「『禅籍目録』刊行へ」（p6-8）および《記述 12》の拙稿「駒澤大学図書館と『禅籍目録』」を参照されたい。

《記述 21》
初代学部長には、初代商経学部長および初代経済学部長を務めた森荘三郎が就任した。商経学部と同時に法政学部の開設を試みたことは、《記述 14》に見たとおりであるが失敗に終わったので、それを教訓に最高裁判所の退官者をはじめ学界で名をなした著名な学者を教授として招聘し開設に漕ぎ着けた。なお、このときは法律学科のみの開設であり、政治学科が開設されたのは昭和 47 年（1972）のことである。開設時の招聘教員等については、『九十年史』第 1 章第 1 節 p1-6 を参照（対応する『百年史』は下巻第 2 編第 4 章「法学部」p1150-

1159 を参照。特に馬屋原成夫（1908-1984）は記名で森が初代法学部長となった経緯を記しており有益である)。

《記述 22》

昭和 47 年（1972）開校 90 周年記念事業として、本学では日本宗教学会第 31 回学術大会が開催され、三笠宮崇仁殿下を拝請し、「古代オリエントにおける天」と題する記念講演が行われている（同年 10 月 20 日)。藤田は『遺影』において同殿下との関係について、「私は終戦後、東京―大阪間を走っていた特急ツバメ号で大阪から帰京の際、丁度宮様と向かい合って同車する光栄に浴し、いろいろ古代民族学のお話など承わり、また誘われるまま、名古屋駅ホームで一緒にラジオ体操（当時は停車時間も長かったので、乗客はそんなこともした）やったりした事があった」(p147。初出は『好来会誌』第 12 号、1972 年）と述べているので個人的関係もあったのであろうが、同殿下招聘にあたってはおそらくは当時の日本宗教学会長石津照璽（1903-1972。石津は 6 月 6 日に逝去しているので三笠宮殿下の講演時には故人となっていた）や古野清人（1899-1979）の力が大きかったのではないかと想像される（石津も古野もそれぞれ本務校を退官後、本学教授として着任していた)。それはさておき、80 周年記念時における正力松太郎への名誉博士授与の件といい、90 周年時の三笠宮殿下の記念講演といい、名士や皇室関係者の名が見えることは、かかる「権威」によって本学の名を高らしめようとする藤田の意図があったものと私は思うのである。

また、本稿冒頭に掲げた「年表」に明らかなように、本学では八十周年記念事業時の日本佛教学会学術大会から始まって、「周年事業」の一環として全国学会を開催するのが言わば定番化するようになる。今回の 140 周年も来年（2023）には第 92 回日本佛教学会学術大会が予定されており、再来年（2024）には第 85 回私立大学図書館協会総会研究大会、第 59 回佛教図書館協会総会研究大会の開催が予定されている。

《記述 23》

旧図書館への搬入が 27 万冊であったことは『百年史』下巻（p1602）に見えるが、当時の第 10 代図書館長若月正吾（1916-2001）も「新図書館の竣工にあたって」(『駒沢大学父兄会報』No36、1973 年）において、「二七万冊に上る蔵書を動かすのは、一朝一夕ででき得る仕事ではない」(p18）と証言している。

また、若月は「図書の収容力は七〇万冊で、一時に九六七人利用できる閲覧座席数を持つ」とも伝えている。さらに若月は昭和 48 年（1973）2 月 19 日に行われた竣工式法要で当時の榑林皓堂総長、加藤宗厚新図書館建設委員長の慶讃の頌が次のようなものであったことを記録しているので紹介しておきたい。

拈香法語

蔵殿竣工す二月の春、
寒梅薫を発して機輪を転ず、
輯書百万雲外に堆（うず）たかし。
驪珠を捜得す幾人か有る。

慶讃の頌

行持道環す九十余年、
即今円成す駒沢の書館、
慶するに堪えたり野衲七十八歳、
伏して願わくは
学徒身心学道せんことを。

なお、『百年史』は竣工時の収容冊数能力について「六七万一、一五〇冊」と記録しており（下巻第 3 編「駒沢大学図書館史」p1601）、これは前に若月が「七〇万冊」としていたそれと概ね一致する。

ところで、『九十年史』第 6 章「図書館」は「昭和三十七年度までは、年間の図書の増加は三千冊前後であった」（p560）とし、さらに「昭和四十年以降図書の増加は年間一万冊を超えるに至り」（p561）と述べ、「四十六年末現在は二二四、七八〇冊年間増は約一万六百冊」（p566）であったと言っている。したがって、前に若月が言う「27 万冊」とは雑誌等を含めた総冊数であろうと思われる。

さて、開館した第 2 代図書館 4 階には、ともに昭和 44 年（1969）に再開された『禅学大辞典』（当初計画時は『禅宗辞典』）、および『曹洞宗全書』の覆刻と『続篇』および『別巻』の編集実務のための部屋がそれぞれ設けられ、多くのスタッフがその作業に従事した。上記に関わったスタッフの中でいま学内にあるのは、総長の永井政之と仏教学部教授の佐藤秀孝のみであろう。『禅学大辞典』全 3 巻と『続曹洞宗全書』の最終巻は、駒澤大学禅宗史研究会の研究成果である『慧能研究』（研究代表田中良昭、大修館書店）とともに昭和 53 年

（1978）に完成を見た。これらはある意味では『禅籍目録』、『新纂禅籍目録』、そして第 8 代図書館長加藤宗厚（1895-1981）による『正法眼蔵要語索引』上・下巻（理想社、1962-63 年）とともに本学図書館が生んだ成果と見ることもできよう。

《記述 24》

おそらくは『大智偈頌』の「借伴経過異類中、耕雲種月起家風」にもとづく。平成 30 年（2018 年）《禅博》（耕雲館）に隣接して完成した 3 号館は「耕雲種月」から「種月館」と名づけられた。

《記述 25》

『駒澤大学学園通信』第 55 号（昭和 49 年 12 月 16 日発行）第 3 面には、「三笠宮殿下図書館を御訪問」の記事が掲載されている。それによれば、同殿下の図書館参観は 11 月 5 日午後のことで、出光美術館関係者 3 名とともに来館された。その目的は自らが中心になって設立した「財団法人中近東文化センター」の建物構想のためであったという。ところで、同殿下の来館を伝える『学園通信』の同じ紙面には、第 10 期の日本学術会議会員に仏教学部桜井秀雄教授（第一部人文科学系）と法学部滝野文三教授（第二部法学系）が当選したことが報じられている。これに関し、藤田は次のように述懐する。

> 今年十一月には、日本学術会議会員の改選期なので学会やゾレシャは、それぞれ動き出しているが、駒沢では、私が専任ででもあるかのように、ノンビリムードである。現在までは、民法の滝野文三教授、哲学は客員教授の宮本正尊先生の二人を出していた。宮本さんの時など、京都の竜大、谷大は勿論、種智院大や高野山あたりまで行って工作したが、本学を辞められた以上、今度こそは駒沢出身者を出したいと思った。そこで、若手の桜井か若月をと考えていたが、上級生だというので桜井秀雄君にしぼり、内輪を固めた。そこへ、宮本さんから東大を辞めて早稲田に行くという某先生を推薦してきたが、私は断わった。六月二十七日、立正、大正との三大学長会議の席上で、「東大出ばかり重んじないで、東部仏教三大学の中から出したいと思いますので、駒沢では桜井秀雄君を決めております。なにとぞ協力をお願いいたしたい」と提案し、決議してもらった。（中略）結果、十二月一日の新聞掲載の如く、駒沢大学教授二名が当選した。「藤田副学

長は、選挙が好きだから……」などと、ひやかす者もいる。私は文部省助成を余計取りたいためでもあるが、駒大を内外ともに〝天下の駒大〟として充実させたい執念からである」（『藤田遺影』p193-194。下線は奥野による。初出は『好来会誌』第 14 号、1974 年）。

いまとなってはこういう時代だったのかと思うばかりであるが、「駒澤」の名を高らしめようとする藤田の執念と熱情が看取される記述といえよう。さらに中村元が『仏教語大辞典』（東京書籍、1981 年。縮刷版）の「あとがき」（p5）において、財団法人・東方研究会の設立にふれた箇所で「財団法人・東方研究会をつくるにあたっては、駒沢大学副学長・藤田俊訓師の厚意により駒沢大学から」寄付があったことを示唆しているが、当時は言わば藤田個人の決裁によって大学の資金を自由に動かせていたことを思わせ、まさに“駒澤天皇”を彷彿とさせ、隔世の感がある。

ともあれ、藤田は桜井と若月をはじめ大山興隆（駒澤大学高等学校教頭）、堀口英一（事務局長）、菅原光信（事務局長）、石井清道（就職部長）等の事務職員を幕下において大学運営にあたり、いまの本学の基盤を作ったのである（以上のカッコ内の役職はそれぞれ退職時のもの）。

《記述 26》

新時代に対応すべく、まだ不十分なものながら令和 3 年（2021）2 月に禅ブランディング事業の一環として『禅籍目録電子版』を公開した。参照していただければ幸いである。→ https://zenseki.komazawa-u.ac.jp/first.php

ただ、残念なことに以後、大学による予算措置が講じられず、追補をなし得ていないのは遺憾なことであり、忸怩たる思いである。

《記述 27》

駒澤大学新図書館は地上 6 階、地下 3 階（延床面積 10.937 ㎡）よりなる。昭和 48 年竣工の第 2 代図書館の延床面積が 10.036 ㎡であるから規模的には旧館とほぼ同規模である。《記述 22》見たように昭和 48 年開館時 27 万冊であった蔵書数は、2021 年度末には館内所蔵 90.7 万冊、外部書庫保管 31.3 万冊の合計 122 万冊に達している。平均すると 1 年間に約 2 万冊ずつ増加していたことになる。

上記したように旧図書館（第 2 代図書館）と新図書館（第 3 代図書館）の延

べ床面積はほとんど同じであるから、集密書架が導入されたとはいっても、おそらく近い将来再び書庫問題に直面することになるであろう。したがって、これから図書館はますます電子化が進むと予測される。

新図書館は近年の大学図書館に求められる多様なニーズに応え得る図書館を標榜し、次の点に意が用いられたという。

・建物中央に書架を集中配置し、開架率を飛躍的に向上させる「智の蔵」
・階層ごとに〈収蔵〉〈交流〉〈学修〉〈調査〉〈研究〉という概念を設け、上層部に行くほどに学びの専門性を高め、入館者が求める滞在場所を自由に選択できる「フロアゾーニング」
・多様な学修スタイルに応じ、時代に即した学修・研究を行うことができる「多様な閲覧スペース・学修空間」

大山礼子図書館長（法学部教授）が『学園通信（Know）』第 353 号（2022 年 7 月）に寄せられた「図書館の書架は知識の森、情報の玉手箱」は、短文ながら新図書館の意義を端的に、見事にまとめておられるので是非参照されたい。

おわりに

本稿作成にあたっては、本学禅文化歴史博物館学芸員の佐藤大樹氏、ならびに仏教学部准教授の大澤邦由先生に多大のご助力をいただいた。また図書館運営課長の倉持勝氏からもご教示にあずかった。記して感謝の意を表したい。

当初、本稿を本紀要に発表する意図はなく、本稿は締切間近の短時間のうちに講座資料を改稿して示したものに過ぎない。そのため十分な論述ができていないことを自覚している。近い将来、補正したい所存なので忌憚のないご批判とご教示をいただければ幸いである。

「140 周年」は「150 周年」への始まりである。本学では『百二十年史』を最後にいわゆる“正史”が刊行されていないので、10 年後には新たに『百五十年史』が発刊されていることを期待して拙い本稿を閉じることにしたい。

最後に本紀要への掲載を慫慂してくれたのは編集係の石井清純先生であり、またとにもかくにもまとめることができたのは同じく編集係の村上晶先生のおかげである。両先生には記して感謝申し上げたい。

＊禅文化博物館関係の展示資料は、そのほとんどを禅文化歴史博物館 HP で見ることができるので参照されたい。

＊無料公開講座で配布した資料には、初歩的な誤認をはじめ多くの過誤があった。この場を借りて謹んでお詫び申し上げたい。

＊本稿には、「駒澤」と「駒沢」の表記が混在するが、「駒沢」は引用元の表記を尊重したほか、現在の地名は「駒沢」と表記した。

（2022 年 11 月 26 日脱稿、2023 年 1 月 17 日追記）

〈キーワード〉大学昇格、関東大震災、図書館建設、禅籍目録、藤田俊訓、小川霊道

＊《記述 15》において、藤田俊訓が昭和 34 年（1959）、「学寮・研究室・体育館等建設委員会」を設置したことを述べたが、初校に思いのほか余白があったので以下に《付録》として時の総長保坂玉泉と藤田の連名で「建設実行委員」に宛てた挨拶状を掲げておきたい。新校舎建設に寄せる大学の思いが看取されよう。

暑中御伺い申し上げます

尊台愈々御清穆の事と存じお欣び申し上げます
本学興隆につきましては格段の御尽力に預り特に過般来建設実行委員に御就任頂き復興計画推進のため御協力を賜り拝謝申し上げて居ります
御蔭様にて全国各地の同窓、御寺院各位より夫々逞しい御鞭撻を仰ぎ序々に促進致して居りますので近い将来必ずや所期の目的を達成し時代の進運に相応しい教育施設を充実し得るものと確信致して居ります
御協力を仰いでおります御管内勧募につきましても其の後何ら御伺いも申し上げず失礼に打過し居りますが不日実情の御回報を希い度く存じますれば何とぞ一層の御支援を悃願致します
なほ、本学に於きましては明年度新入学生受入れの体制も着々と整備致して居りますので後進学徒育英のためにも御高慮を賜り本学発展に御尽瘁を仰ぎ得ますよう併せてお願い申し上げます
頃者炎暑酷しい折柄切に御自愛の程祈念致します

敬具

昭和三十五年盛夏

駒沢大学

建設委員長 総長 保坂玉泉

建設副委員長 学監 藤田俊訓

建設実行委員各位

侍史